わたしはなぜ旅に出るか

四方田犬彦（よもたいぬひこ）
明治学院大学教授

わたしはなぜ旅に出るのか。わたしはなぜ移動を愛するのか。

これは人間の実存に関わる本質的な問いであり、古来より哲学者や芸術家が好んでとりあげるテーマであった。ゲーテにとって旅とは、学識を深め、世界の神秘のあり方を見つめるために絶好の機会であったし、ネルヴァルにとっては、自分が精神病から完全に回復したことを確認するための儀礼であった。ランボーにとっては強い脱出欲望の結果であり、ベンヤミンにとっては逆に、故郷ベルリンのことをより深く考えるための契機であった。そして、わたしの弟にとっては、よく歩きよく眠る、理想的なスポーツの一種だった。

けれども、ここでわたしはきわめて率直に、自分にとっての旅の目的と効用を三つに定め、その一つひとつについて簡潔に記しておこうと思う。三つとは端的にいって、再生、達観、内省である。

人は旅から生まれ変わってくる

「旅とは少しく死ぬことである」といったのは誰であったか。学生時代に読んだフランスの現象学者の書物に引用されていたこの言葉を、わたしは長い間、行動の指針としていたことがあった。

少しく死ぬというのは、本当に死を体験することではない。どこまでも冗長に、際限もなく続いているかのように見える現世からひとたび滑り落ちて、日常生活とは違った世界に自分を遊ばせるというほどの意味である。現世の側からすれば、これまで側にいた人がいきなり眼の前から消滅してしまうわけだから、死という喩（たと）えを用いたくもなるだろう。

もっともこの死は、行ったきりの死ではない。時間が経てばちゃんと現世に戻ってくる。自分の手のなかで愛玩できる程度の死を体験することこそ、旅の哲学的側面なのだ。これは逆にいえば、本来は脅威であり畏怖すべき事件であるはずの死を、自分の掌で愛玩できるまでにミニチュア化してみせることこそが旅であるといっても、同じことかもしれない。

一般に旅とは未知の空間に移動することだと思われているが、わたしはそうは考えていない。旅とは日常生活とは異なった時間のなかに参入すること

なのだ。もう少しわかりやすくいうと、仕事と休暇の永遠の繰り返しからなる毎日の生活のあり方から離れ、予期せぬ濃淡をもった時間のリズム（というか、リズムの不在）を受け入れ、それに従って行動することなのである。

旅のなかでは時間はこれまでにない極端な相を見せる。一刻も待てないほどに緊急を要することがあるかと思えば、予期せざる長い待機を強いられることもある。だがこの待機を無為だと見なして一人苛立っているならば、その人はまだ旅の時間のなかに上手に参入できたとはいえない。空港で、鉄道駅で、レストランで、思いもよらぬ待機を体験すること。旅とはそうした無為を体験することに他ならないからだ。

宗教学に「通過儀礼」という言葉がある。イニシエーションと英語で書くと、しばらく前まで世間を騒がせた某カルトの試練を連想させてあまりよくないが、もとはといえば人間の一生のさまざまな段階を区切る道標を示す儀礼というほどの意味である。たとえば七五三、入学式に卒業式、元服に結婚式、戦前ならば徴兵検査、さらに厄年、葬式、死後は三回忌や七回忌……こうした人生の節目節目で人はしばしばケジメの儀式を厳粛に行なう。戦後の日本ではその厳粛さはどんどん希薄になってはいるが、それでも何か儀礼を行なっておかないと次のステージに進んだという自覚がしないという人は少なくはないだろう。

社会が近代から遠ざかれば遠ざかるほど、通過儀礼が個人にとってはたす意味は大きくなる。それは一種の試練の構造をもち、試練に失敗した者はいつまでも共同体のなかで大人として扱われることがない。人里離れた遠方に赴いて狩りをし、特定の動物を獲物として持ち帰ること。定められた期間を森のなかで過ごし、虫や獣から身を守って生き延びること。村はずれに設けられた小屋に閉じ籠もって世界の起源をめぐる神話を教えられること。通過儀礼はしばしばこうして、日常生活から離脱し、象徴的な意味で死の領域に参入することを意味している。

こう書いてみるとひどく難しそうに思われるが、何ということはない、わたしがいいたいのは、これまで述べてきた旅行とは、この試練としての通過儀礼という側面が、今日的な様相を持ちながらもどこかで反映されたものであるということだ。

冒頭に引いた「旅とは少しく死ぬことである」という言葉をもう一度とりあげてみよう。これは一時的に生の世界から降りて、どこともつかぬ世界を彷徨（さまよ）い、時満ちてふたたび生の世界へと帰還するという意味である。それが試練であるかぎり、試練を無事にやりおおせた者が以前よりも高い地位の存在として戻ってくることは当然であろう。人は旅から戻ってくるのではない。旅から生まれ変わってくるのだ。

今日のように通過儀礼が厳粛な形で行なわれなくなった社会では、逆に試練としての旅がその役割を代行するという現象が見られるようになった。何も留学や研修の旅行だけを指していっているわけではない。住み慣れた場所を離れて、一定期間を未知の時空のなかで過ごすという体験が、人間の生に刻み目を与え、人はその刻み目を信じつつ、年齢を重ねて成熟へと向かうのである。

旅は人に達観することを教える

旅の二つ目の目的とは、人間に達観ということを教えることである。

わたしが最初に体験した外国は韓国であった。軍事独裁政権のさなかのソウルに日本語教師として赴き、日本では体験することのなかった民族主義的気概に満ちた学生たちの間で一年を過したのである。

わたしの滞在中に大統領が暗殺され、非常戒厳令が全国に発令された。大学は閉鎖され、午後8時以降の外出は禁止された。街角には戦車が溢れ、銃を手にした兵士たちが要所の警備を固めた。とはいえ市民たちは冷静で、市場はあいかわらず開いていたし、電気屋の前で怪訝（けげん）な顔をしながらラジオに聞き入ったりすることを除けば、淡々と日常生活を続けていた。

大統領が暗殺された直後から、わたしは「これはいい機会だから、徹底して観察者の眼に徹しよう」と決意した。ひょっとしてイシャーウッドの小説『わたしはカメラ』（邦題は『さらばベルリン』）が念頭にあったのかもしれない。とにかく外出が許可されている時間はできるかぎり外に出て人々の反応をメモし、街角で配られている号外を何種類も集め、知人友人から事件をめぐる意見感想を尋ねまわった。

ある人は、独裁者が非業の死を遂げて胸がせいせいしたと語り、別のある人は、この混乱に乗じて北朝鮮がふたたび38度線を越えて侵略してくるのではないかと、不安を漏らした。次に登場する権力者がさらなる横暴を重ねるのではないかと憂慮する人もいた。

こうしたさまざまな意見に耳を傾けているうちに、自分があまりに冷静で無感動であることに、しだいに奇妙な感じがしてくるのだった。どうしてわたしは解放感も不安も感じないのだろうか。理由は簡単であった。わたしは外国人であり、韓国でいかなる事件が生じようとも所詮は他人事であったためだ。だが、それゆえにわたしがある達観の姿勢のもとに事態を観察できたことも事実であった。

しばらくして帰国したわたしは、この時期の日本の大新聞を手にして驚きに包まれた。一面から三面までが暗殺と戒厳令で埋め尽くされ、あたかもソウルで天変地異が起こり混乱のさなかであるような報道がなされていた。それは明らかにわたしが事件の渦中で体験した実感とはかけ離れたものであった。日本の新聞は報道するというより、明らかに韓国の事件に面白がっているという印象をもった。ソウルの市民がいささかも動じず、忍耐強く事態に対処していたことを伝える記事はどこにもなかった。わたしが日本の新聞の海外報道に距離を置くようになったのには、このときに感じた違和感が影を落としている。

韓国でのこの体験はわたしに、大事件を前にしたときこそ、達観という態度が重要であることを教えてくれた。現地での冷静さと日本の大騒ぎを、わたしは可能なかぎり客観的に判断しようとした。わたしに達観を許したのは、外国人であること、旅の途上にいることという偶然の条件であった。

旅は人に内省の機会を与える

最後に旅が人間にまたとない内省の機会を与えることを指摘して、このエッセイを終えることにしよう。

一人旅がいいのは、行く先々で気儘（きまま）に予定を変えたり寄り道をしたりできるからである。だが、もう一つそれには利点があって、それは日常生活では雑事にかまけて等閑（なおざり）にしていた、自分との対話をいくらでも続けられることである。背景がどんどん変わってくれるおかげで、これは一向に退屈することがない。むしろ自分の内面に思いがけない発見があったりして、帰国が楽しみになる場合が多い。多くの人が見逃していることだが、旅行に出ることの愉しみの一つは、家に戻ることを想像するところにある。

個人的にいうと、わたしはこの10年来、日本ではなかなか落ち着いて読むことをしない日本の古典文学を文庫本でトランクに忍ばせ、日本語など存在しない異国の地で読むことを習慣がけてきた。一日の大半を外国語に塗（まみ）れて過した夜に、ようやく一人きりになって『方丈記』や『神道集』を繙（ひもと）くことの安堵感は、やはり旅の効用の一つであろう。『日本の書物への感謝』（岩波書店）という書物がこの体験の積み重ねから生まれた。けだし旅にはさまざまな効用があり、それは同時にさまざまな愉しみと言い換えてもかまわないのである。

よもた いぬひこ●明治学院大学教授として映画史の教鞭をとりつつ、映画、文学、漫画、都市論といった領域で幅広い批評活動を続ける。主な著書に『映画史への招待』『モロッコ流謫』。近著に『歳月の鉛』